

まんたら通信

第187号 (通巻209号)

平成24年(2012)01月 佛誕2578年 皇紀2672年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

オンラインワン 日本

昨年、平成23年は有史以来最悪という東日本大震災と、未曾有の原子力発電所の損壊による放射能汚染があり、原発事故は国民から見ると政府の言い分と裏腹に、未だに出口が見えない状態が続いております。

他にも何れも先送りの許されない事柄は多いのですが、この際、敢て別のことを考えたいと思います。

敗戦の昭和20年は都市は皆焼け野原で、神宮外苑や国会議事堂の周りまで開墾してカボチャや芋畑になっていたそうですが、海外からの引揚げや復員軍人で人口が増えた上に稀に見る不作で、多数の餓死者が予想されました。吉田茂首相は、GHQにねじ込んで緊急援助をしてもらいましたが、不足分の見積もりが甘く、大分残ってしまったそうですね。



このことをマッカーサーに非難された吉田さんは、「戦争で負けても外交で勝つ」という、肝の据わった人ですから「正確な統計が出来るほど日本の役所が有能ならば戦争に負けたりしません」と言い返したという、如何にも吉田さんらしい人を食った挿話が残っています。

平安時代、弘法大師空海は志さえあれば誰でも学ぶことが出来る、完全給費制の世界初めての学校『綜藝種智院』(しゅげい・しゅちいん)を作りました。

お公家・官僚の他の一般の人たちが既に学ぶことの喜びを知っていた、つまり勉強したい人がいたということ、世界的にも珍しいことではないでしょうか。

イエズス会のフランシスコ・ザビエルはポルトガルへの報告に、「驚くべきことに、大阪には普通の家の子どもたちのための私塾が数百ある」と書き送っているそうです。幕末生まれの私の祖母は、極く普通の水飲み百姓の家に生まれましたが、父親が困窮裏にいろはを書いて文字を教えてくれたと述懐していました。

鉄砲伝来といえど誰でも知っている話ですが、これには後日談がある。これは商売になると見たポルトガル人が翌年沢山の鉄砲を持参したところ、僅か一年で既に元のものより性能の良い鉄砲があることを見せられて、仕方なく持ち帰ったということ。これは、あの秀吉さんに最後まで抵抗した『根来衆』の鍛冶屋集団が作ったものだとか。

幕末、黒船でやってきたペリーは、町を歩いている時に鍛冶屋さんの仕事ぶりを見て「百年後、日本は我々の強力なライバルになるであろう」と予言したという話もあります。

幕末から明治初め、沢山の外国人が来日して旅行記を残しています。蚊や蚤とシラミと物見高い人々に悩まされながら、東京から函館まで旅をして『日本奥地紀行』を著した英国女性イザベラ・バードは、運送シス

テムの見事さや日本人の律義さについて繰り返し書いています。当時はまた、イギリスの植物収集家もやってきて、郊外の植木屋さんや野山を見て回っています。途中の農家の庭先に花や植木が多いことに驚いています。

ロンドンの労働者は「私たちは、何故こんな不運に生まれたのか」と、貧乏を嘆きながら生きていたというその頃「清貧」は不幸ではないという日本人の思いは、到底分からなかつたということでしょう。

どこまでも続く焼け跡と、うなぎ登りのインフレという荒波にもあそばされていたあの頃、「この国はやがて、アメリカと並ぶ経済大国になる」と誰が想像したでしょうか。

見渡したところ、私たちが持っていたものといえば、水と空気の他には大昔から自然に身に付けてきた、上に書いたような『好ましい資質』以外見当たりません。この島国から出たことのない私たちには、当たり前過ぎて見落としてしまうのですが、先頃来日し私たちに多くの感銘を与えたブータンのワンチュク国王が今回の大災害について国会で話した「...」

他の国であれば国家を打ち破り、無秩序、大混乱、そして悲嘆をもたらしたであろう事態に、日本国民の皆様は最悪の状況下でさえ静かな尊厳、自信、規律、心の強さを持って対処されました。文化、伝統および価値にしっかりと根付いたこのような卓越した資質の組み合わせは、我々の現代の世界で見出すことはほぼ不可能です。...というお言葉に言い尽くされて

いるのではないのでしょうか。

能無し政治家や、税金集めだけが仕事と思っている財務省のお役人など、問題は色々あるけれども、今までのやり方で進んで行けばこの国は必ず復興できて、今まではアジアの国々だけでしたが、世界中の人たちが「日本を見本にしよう」と思うのは間違いありません。

余滴

◆明けましておめでとうございます。吹く風は冷たいものの、まずまず穏やかに過ぎた三ケ日でした。そして沢山の年賀状を戴きましたが、直接ご挨拶を差し上げることが出来なかった方も多いと思います。

この場を借りて、今年も『まんたら通信』を宜しくお付き合い下さいますよう、お願い申し上げます。

◆下立松原神社の『神狩神事』は陰暦11月26日から12月5日までで最後の日が、『夜明かし』ですが、今年12月29日でした。

ご祭神、由布津主命(ゆふつぬしのみこと)が、畑を荒らし回るイノシシや鹿を退治して下さった故

事に因んだ行事ですね。この10日間、神主さんは朝早く総代さんと一緒に、このお寺の裏1キロほどの『鹿倉(かのくら)山』(土地の発音では『かのーら又はおんべえやま』のほころにお参りします。子供の頃、困窮裏端で「鹿を縛る縄がなくて、曲田(まがった)の小平やーい」って呼んで縄を持ってきてもらった、という昔話を聞きましたが、今考えると神様ほどの方がそんなとんなまな筈はないですね。

他にも、お籠りの夜中に古ダヌキが「俺にも火に当たらせてくれ」と仲間に入って、『八畳敷き』に困窮裏で焼いた小石を放り込まれ「なまっくすべのほーっどん」と言いながら

山に逃げ帰った...などという、のんびりした話も聞きましたが、今の親御さんはそんな話を我が子に聞かせているのでしょうか。

◆フユイチゴ(カンイチゴ)【バラ科キイチゴ属】の実です。12月初め、三芳の中堰散策道で。

実の大きさは小指の先ほど。静まり返った里山の、林の縁の木漏れ日の中で見つけると、ハッと息を呑むようなルビー色がとても印象的です。地面を這うように生えています。

甘酸っぱくて美味しいのですが、エサが少なくなる季節の小鳥たちのために、我慢して帰りました。 2012/01/06 龍渉



にっぽん人情小噺 第七十二話 日本に行くよ

落語家 三遊亭鳳豊

今年もお正月がやってきましたが、「明けましておめでとう」とは言えない日々が続きます。やはり、東日本大震災で被災された方々のいまの暮らしを考えると、政府は何をやっているんだと思いますね。私自身、こんな暗い新年は初めてかもしれません。

それにしても、子供の頃は、お正月が来ると楽しかったですねえ。なぜか、元旦の朝、家の前の通りを右からと左からお坊さんが歩いてきて、それを見た私の父親が、私を呼んで言いましたね。

「ほら、見てごらん、和尚がツー」

くだらなかつたけど、今日の私を形成した決定的な一刻でございました。

さて、ここに一冊の本があります。

「みやぎ聞き書き村草子第十一集（みやぎ聞き書き村草子舎発行）」という冊子です。

仙台に住む境数樹さんとその仲間たちが地元宮城県のお年寄りたちから話をうかがって、それを「聞き書き」という手法を使って、これまでもいくつもの冊子を作ってきたのですが、その第十一集目がすごいのです。

なにがすごいかと言うと、今回は被災者でもある皆さんが、宮城県内の被災者に話を聞いてまとめたという「東日本大震災特集」だからです。読んで、涙が止まりませんでした。

「大津波から子供を護らねば」（斉藤早苗聞き書きⅡ中津川良子）は、南三陸町志津川にある戸倉小学校の先生の聞き書きです。

斉藤早苗先生はこう言っています。「今考えると、私たちは子供を津波から護る一心で動き回ったけど、実は子供たちがいたお陰で、自分たちも逃げる事が出来

来たと思うのです」と。斉藤先生の家ももちろんあとかたもなく流されたそうです。それを確認したのは、地震後三日目だったそうです。

その他「もうたくさん三度目の巨大津波」（勝倉國司 聞き書きⅡ境数樹）、「梁にすがって漂流一キロ・最後は泳いだ冬の手」（鈴木八雄 聞き書きⅡ佐藤正弥）、「奥さんを目の前で流された『きよ子』」（鈴木善雄 聞き書きⅡ大橋信彦）など、聞き手も被災者であることで、初めて口を開いてくれた「聞き書き」もあります。

そうなんですよ。取材に来た新聞記者やテレビのアナウンサーに話すのとは、ちがうでしょうからねえ。

そんななか、昨年十二月三日付けの「朝日新聞」の夕刊にこんな記事が出ていました。お読みになった方もいらつしやるでしょうが、ご覧になっていない方のために、ここでご紹介しましょう。

東北地方を旅行中に東日本大震災に遭い、津波に流されながらも生き延びたドイツ人一家の話です。

主人公は、ドイツのデュッセルドルフに住むシュピールベルクさん（七十二歳）ご夫妻とお嬢さんです。

娘さんが大学で日本学を学んでいることもあって、シュピールベルクさんご夫妻は二〇一一年の三月六日に来日したんです。

そして、娘さんの案内で三月十日、日本三景のひとつ松島に宿泊しました。あそこはきれいですからねえ。そして、翌十一日午後、鉄道で仙台に向かう途中で激しい揺れに襲われたわけです。

生まれて初めての体験だったそうです。見ると、まわりの乗客が列車からどんどん降りていくのであわてて飛び降り、タクシーを見つけ仙台へ急いだ。

と、その時、巨大な波が襲い、気がつく

「外へ」という運転手さんの指示で外に出ると、もう胸まで水が来ていたとい

ますから危機一髪ですね。民家のバルコニーまで泳ぐと、そこにいた男性が、力が

尽きそうになっていた妻のアンゲラさんを引き上げてくれたそうです。

家の持ち主らしい老夫婦が貸してくれ

た毛布にくるまり、一夜を過ごした。

人生で最も寒い夜だったと言います。

それから十二時間後、救助隊がやってきて、「水のなかを少し歩くけど、かまいませんか」といねいに尋ねたその姿に

「こんな時でも礼儀正しい日本人の姿に、心の底から感嘆した」と言っています。

避難所に着いたら、見知らぬ女性が携帯電話を貸してくれ、それによって、自分

たちの無事をドイツに残る息子に知らせることができたそうです。避難して四日

後、避難所のリーダーが車を用意してく

れたのですが、その時に避難所の人がそつと封筒を差し出したそうです。車の

なかで開いたら、「ガソリン代に」というメモと現金。信じられない思いだったそうです。

ているのに、私たち外国人一家を助けてくれた。そのたびに、「本当にありがとう。私たちは、あなたたちに何を恩返しすればいいですか？」と聞くと、どの人も、どの人も、シュピールベルクさんの手を握り、同じことを言ったそうです。

「また、日本に来て！」

シュピールベルクさんは、奥さんのアンゲラさんに言いました。

「絶対、日本に行こうね」と。

「絶対、日本に行こうね」と。

「絶対、日本に行こうね」と。

「絶対、日本に行こうね」と。

「絶対、日本に行こうね」と。

「絶対、日本に行こうね」と。

「絶対、日本に行こうね」と。

「絶対、日本に行こうね」と。

「絶対、日本に行こうね」と。

「絶対、日本に行こうね」と。



長福寺の本尊さま 大修理へ

地域とお檀家のご先祖を、長い間守り

続けて来た本尊のお地蔵様。

長い年月の間に傷みが多くなり、役員

さん達と龍芳住職が相談して、修理の運

びとなりました。

修理に当たるのは東京の榎ほうじゅ彫

刻工房さん。今月十七日から一年の予定

で、費用は約三百五十万円とのことだ

す。

慶応義塾大学文学部教授紺野俊文先生

によると、この本尊さまは鎌倉時代、七

百年前に作られたものだそうですが、ほ